百合子賞　正賞　受賞作品

声

郡山ザベリオ学園中学校

～第一章～

ピピピ…。目覚まし時計の音が聞こえる。目を開けると明るい光が飛び込んできた。私は重いまぶたを必死に開けて、アラームを止めた。寝ぼけているせいか、景色がかすかにぼやけて見える。階下に降りるとお母さんが朝食の準備をしていた。

「お母さん、おはよ。」

と、声をかける。

「おはよう、亜紀。早くご飯食べてね。」

と、お母さんも返してくれる。いつも通りの朝の光景。私は洗面所で髪をくくって、朝食の席に着いた。ぼーっとしながらパンをかじっていると、どこからか声が聞こえてきた。

【もっと早く起きてくれればいいのに。】

「お母さん、今なんか言った？」

「何にも言ってないけど。どうしたの。」

と逆に聞き返されてしまった。空耳だったのかもしれない。

「ううん。何でもない。」

空耳にしては、はっきりし過ぎていた気がするが、取りあえず食べることに専念する。

【亜紀は時間大丈夫なのかな？】

そう聞こえて時計を見た私は、大慌てで玄関をとびだした。

「ホントだ。いってくるね。」

そう叫ぶと、後は脇目もふらずに走り出した。後ろでお母さんが首を傾げていることも知らずに。

全速力で走って学校へ到着すると、ちょうどチャイムが鳴った。なんとか間に合ったみたいだ。心の中でほっと息をついていると、いつものようにたくさんのクラスメイトが私の席に集まり始めた。みんなと一通りあいさつを済ませると、教室に先生が入ってきて、それぞれが席についた。私は、自慢じゃないがクラスで特別な存在だ。朝来れば、みんなが寄ってきて私と話そうとしてくるし、いつもちやほやされる。言うなれば、みんなの憧れの存在だ。そんな事を考え、にやけながら席に着き、学活が始まるのを待っていると、不意に何とも言えないような違和感を覚えた。いつもなら、先生が話しているときには多少は静かになるこのクラスが、今日はたくさんの言葉であふれかえっていたからだ。

先生からは二つの声が聞こえて来るし、他の人たちは誰に返答を求めるでもなく、思い思いに声を出しているだけ。それだけでも驚きだが、何よりも一番恐ろしいのは、先生以外は誰一人として口を開いていないことだった。声は聞こえて来るのに。私は驚きと恐怖で、声も出なくなり、一気に意識が無くなった。

目を開けると、白い天井が見えた。自分がどこにいるのか把握できずにいると、誰かが、

「気がついたみたいだね。」

と私に声をかけてきた。視線を横にずらすと、保健の先生が笑顔で立っていた。三十代前半の美人な人で男女どちらにも人気が高かった。けれ

ど、きどっているように見えて、私にはどうしても好きになれなかった。
私は、冷たい声で、
「もう大丈夫です。お世話になりました。」
と作り笑いをしながらお辞儀をし、保健室を出ようとした。すると後ろから、
【藤野さんって、すごくきどっているところ、直した方がいい気がするよ。】
と聞こえてきた。勢いよく後ろを振り返ると、先生は驚いたような顔をして、私を見てきた。それは、こっちのセリフよ。どんどん怒りが込み上げてきた。腹いせに、
「時田先生、早く結婚した方がいいですよ。」
と、満面の笑顔とともに言い放ってやった。すると、彼女は、自分から吹っかけてきたくせに、
「いきなりどうしたの？」
なんて聞いてきた。驚いて、先生の顔を見つめていると、
【何もしていないのに、何でキレてるの？】
と口も動かさずに話しかけてきた。私は、怖すぎて、悲鳴をあげながら廊下をただひたすら走った。
　走りながら、私は必死に頭の中を整理しようと試みた。みんな、腹話術を習得したのかな？それとも、私の目と耳がおかしくなったとか。いろいろと馬鹿な妄想をしている自分が、我ながら恥ずかしかったが、そのうち一つの考えが心に浮かんだ。口を動かしていないのに聞こえて来る声は、みんなが考えていること、つまり心の声であり、私、藤野亜紀には、いきなり心を読める能力が備わった。そう考えると筋が通る。けれど非現実的すぎて、ありえるわけがない。そんなふうに、思いを巡らせているうちに、教室にたどり着いた。一旦ドアの前でたちどまり、息をついてから中へ入った。
「亜紀、具合大丈夫？顔色わるいよ。」
「亜紀いないとつまんなかったよ。」
「藤野、おまえの分のノート…」
などと、みんな口々に声をかけてくる。ああここはいつも通り。安全だ。そう判断し、安心した私は、弱々しい笑顔を顔に貼り付けて、
「大丈夫だよ。ありがとね。」
と控えめに対応した。私を取り巻く、グループの子。そのグループを羨望のこもった目で見つめている教室の隅の子たち。そして、私のことをちらちらと覗き見る男子たち。そんな私のクラスの完璧な構図は今日も崩れていなかった。そう思ったのに。
【亜紀ちゃんって分かりやすいなあ。】
隣からそう聞こえてきた。いつもだったら、こんな事を言ったら、誰かしら私を擁護してくれるのに、今はだれも声をあげないどころか、誰も気づいてすらいないようだった。仕方なく自分で声を上げようと思った時、さっきの考えが頭をよぎった。声のした方を見ると、普段通りの顔で私を見上げる女子と目が合う。さっきの声が、もしあの子の心の声なのだとしたら。そう考えると、みんなが反応しないのも合点がいく。裏ではそんな風に考えられていたのかと思うと、怒りがこみあげてきた。いったい誰のおかげでクラスになじめたと思ってるのよ。そう心の中でつぶやくと、彼女の手を引いて、足早に廊下へ出た。
「ねえ、恵ちゃんさあ、私のことどう思ってる？」
そう単刀直入に聞いてみると、彼女は一瞬目を見開いたあと、戸惑いながら、
「優しくてとても良い人。」
と答えた。でも、さっきの声は間違いなく恵の声。そう確信している私は、少し彼女のことを睨みつけるようにしながら、
「他には？」

と畳み掛けるように聞くと、
「美人で成績もいいし、運動もできてみんな憧れているよ。」
【怖い。誰か助けに来てよ～】
と、今度は同時に聞こえてきた。これじゃ、まるで私が悪役みたいじゃない。そう考えると、これ以上恵をゆすってもどうにもならない気がして、
「ごめんね。変なこと聞いちゃって。恵ちゃんが私のこと裏切るわけないものね。私の勘違いだった。」
そう言うと、固まったままの彼女を残し、教室のなかに入った。
授業の間、私はずっと上の空だった。まさかあんなに悪口と縁がなさそうな子が。私に恩があるはずなのに。様々な思いが、心の中を渦巻いていた。
昼になり、私は購買に昼食を買いに行った。何を買おうか思案しながら歩いていると、違うクラスの男子3人とすれ違った。3人はとても盛り上がっていた。けれど、私の耳には、全く別の文章がたくさん流れ込んできた。
【あっ、五組の藤野じゃん。】
【あいつ、いいうわさ全然聞かないよな。】
【きどってて、苦手だってだれかが言ってるの聞いたことある。】
びっくりして、涙が出てきそうだった。これ以上声を聞くまいと、夢中で走った。
教室に入ろうとして、私は誰かにぶつかった。恐る恐る目を開けると、田宮君が不安げにこちらを見ていた。何故だかわからないが、彼を見ると私の心がドキッとはねる。私は、動揺したのを悟られないように視線をそらした。
「目赤いけど、大丈夫？」
言われて初めて、私は自分が泣いていたことを知った。私は、たまっていた涙をほろりとながしながら、上目使いで彼を見上げてみた。彼は、すっと私から目線をはずした。
「ごめん。何でもないから。」
と話しかけてみると、
「う、うん。」
と、返ってきた。田宮君はおとなしくて、男子にはよくからまれているような人だ。優しいのか、単に気が弱いだけなのかはよく分からないが、女子にも話しやすい。基本おっとりしているが、その端正な顔立ちも人気の要因である。田宮君が人を悪く言うところを見たことがないし、彼に何かをした覚えもないから、大丈夫だろうとは思ったが、さきほどから激しく心をえぐられていた私は、心の声が聞こえるのが怖くなって、顔を伏せながら、立ち去ろうとした。
【いつもは俺には笑って話しかけてくるのに、今日はどうしたんだろう。まだ本調子ではないとかかな。】
田宮君からそう聞こえてきたとき、今までさんざんに心の中で言われてきて、沈んでいた私の胸の中に、暖かいものが広がると同時に、涙がこぼれそうになった。必死に涙をこらえている私に、また彼の思いが聞こえてきた。
【俺のこと、見下して笑ってくるくせに、こういうときだけ調子いいよな。】
違う。私の勘違いだった。あの田宮君まで。私を心の中で馬鹿にしていたのか。さっきこらえた涙が、一気に冷たく変化して、頬を流れ落ちた。
【なんでいきなり泣くのかもう訳が分からないよ。】
「大丈夫、藤野さん。やっぱりまだ休んでいた方がいいかもよ。」
もう、田宮君のことを直視できない。
「田宮君は、私のこと、嫌いなの？」
かすれた声で、なぜかそう問いかけていた。

「いきなり何？僕、なんかしたっけ。」
【藤野に話しかけられるの、苦手なんだよな。ここで、嫌いとかいったら、恐ろしいことになりそうだし。】
「なんで？あたしに助けてもらったくせに。」
もう、聞き取ることが難しいくらいに声が小さくなっていくのが、自分でも分かる。
「そうだね。本当に感謝してるよ。」
【はあ？おまえが起こした問題だろ。】
どんどん田宮君の心の声が、苛立ち始めた。二つの声が混ざり合って聞こえて来る。その内容が真逆であるほど、私の心の傷が大きくなってゆく。呼吸が荒くなってきた。必死に声を絞り出した。
「あなたは、私のことを、ずっと見ていたじゃない。」
「ぼくにはそんなつもり…」
【まさか、俺がおまえのことを好きだったとでも思ったか。俺の心をズタズタにしておいて。】
「ズタズタにしてきたのは、あなたじゃない。今も以前も、傷ついているのはあたしよ！」
田宮君はとうとう、口を閉ざした。その分、思っていることが、鮮明に聞こえて来る。
【何を言ってるんだ。自意識過剰だ。だから嫌われるんだ。】
聞いていられなくなって、耳をふさぎ、しゃがみこんだ。その間にも、涙は、止まることを知らず、流れている。田宮君は、何か怒鳴ったあと、そんな私を冷たく見下ろして、去って行ってしまった。あの人は私になにを言ったのだろう。もう、何も理解できない。私は引き留めることもできずに、ただただ泣いていた。
　ふと気付くと、教室中の視線がこちらに向けられていた。相変わらず、みんなの思いが飛び交っている。もう動く気力さえなくした私は、それをただただ聞き流していた。
　そんな時間が、いったいどれほど続いたのだろう。誰かに肩をゆすられて、私は我に返った。
「亜紀、しっかりして。亜紀らしくないね。私はあなたの味方だよ。」
一番の親友。昨日まではそう信じて疑わなかった、咲菜の声ですら、もう信用できない。だって、
【亜紀もやっと痛い目見たのか。そうでもしないと、ずっとこのままだったもんね。丁度良かったかも。】
なんて、一緒に聞こえてくるから。音を遮断しようと、必死に抑えた手も無駄だった。次から次へと、手をこじ開けて入ってくる。
【自己中な奴め。】
【自分が女王か何かだとでも思ってたんじゃないのか。】
【馬鹿だよねえ。】
【何があったか知らないけど、とりあえず、せいせいしたよ。】
今まで私の顔色うかがってたくせに。私を好きとか言ってたくせに。可愛くもない、かっこよくもないあなたたちを、好きでいてあげたのに。私の傘下に置いてあげたのに。どんどん、そんな思いがあふれ出した。
「懲りないわね、あなたは。」
そうはっきりと咲菜が口で話しかけてきた。
「え？」
「あなた、私たちの心の声が聞こえてたんでしょ。同じく、あなたの考えていることも筒抜けよ。」
「俺らのことを、ずっと下に見てきたんだろ。何の権限があって、そんなに好き勝手出来るんだよ。」
「うぬぼれてるなよ。」
そのうち、私の周りをみんなが囲み、もう、心の中ではなく、口に出して私を非難していた。何を言ってるのか聞こえないくらい。のどを嗄ら

すほど、私は怒鳴られていた。
「もう、やめてっ！」
ピピピ…。目覚まし時計の音が聞こえる。私は、勢いよくまぶたを跳ね上げた。夢、か。そう理解した途端、私の頬が、冷たく濡れた。

～第二章～

リリリリ…。目覚まし時計の音が鳴り響く。僕は、回らない頭を持ち上げ、時計をぼんやり見つめる。だんだん視界がはっきりとしてきた。七時四十分。時計の針は間違いなくそう示している。自分の目が信じられなくなって、何度も目をこすってみたが、何も変わらないどころか、どんどん時間は過ぎていく。まずい、今日は、学校に早く行く予定だったのに、これじゃ遅刻ぎりぎりだ。布団から出ると、一気に階段を駆け下りた。
「母さん、おはよ。」
朝食の準備をしている母さんに声をかける。
「おはよう、優斗。早くご飯食べてね。」
といつも通り、返事が返ってくる。
「ごめん。時間ないから、もう行くよ。」
そう言うと、かばんを持って、玄関へ向かう。
【もっと早く起きればよかったのに。】
と聞こえた気がして、
「目覚まし時計の設定を間違ったんだよ。」
と返し、家を出ようとした。後ろから、
「いきなりどうしたの？」
と言われて、母さんから話しかけてきたのに、と言い返したくなったが、時間が無いので、慌てて家を飛び出した。
猛ダッシュして、学校へ行くと遅刻は免れたようだった。ほっとしたのもつかのま、後ろから強烈な殺気を感じた。恐る恐る後ろを振り返ると、その瞬間にけりを入れられた。
「何だよ、原田。痛いんだけど。」
そういうと、幼馴染の原田歩の目が吊り上がった。まずいっ、と思った途端に、
「早く来るって言ってたのは、どこの誰だよ。まったく、俺が何時間待ってたと思う？」
とぐちぐち言い始めた。
「本当にごめん。昼おごるからさ。」
と謝ってみると、
「おまえ、俺が食べ物につられるとでも考えたか。」
とか、いろいろ言ってきた。顔がにやけているので、大丈夫だと思うが、やっぱりなんと思われているかが気になる。嘘つきだとか、思われていないだろうか。そんな風に、思いを巡らせていると声が聞こえてきた。
【さてと、一時間目の授業ってなんだっけ。】
「数学だよ。」
そう答えてから、違和感を覚えた。今、原田の口が動いていなかったような気がする。驚いて原田を見ると、こちらもびっくりしたような顔をして、固まっていた。教室に先生が入ってきたので、二人とも席についたが、釈然としない思いを抱えていた。そのうちにさっきの違和感が心の中でどんどん膨らんできた。なぜ、こんなにみんなが同時にしゃべっているのだろう。どうして、みんな口が動いていないのだろう。様々な疑問が頭の中を瞬時に駆け巡った。けれど、いちばん恐ろしい事は、思い思いの事をしゃべっているのに、皆が真面目な顔をして、前を向いていることだった。怖すぎて、何も考えられなくなった。
どのくらいの間、そうしていたのだろう。気がつけばみんなが席を立ち、教室の中を移動し始めていた。

「おーい。聞こえてる？」
と、隣の席の瀬戸さんが話しかけてきた。
「うん。ごめん。」
と返すと、瀬戸さんはにこっと笑った。すると、彼女の口が動かないまま、声が聞こえてきた。
【宮田君って、なんだか…】
はっとした。自分の名前が聞こえた気がして耳を澄ましていたら、
「亜紀、大丈夫？どうしたの。」
と、彼女がいきなり誰かに話しかけた。驚いて、慌てて横を向くと、藤野さんが床に倒れていた。
　ざわめきが大きくなった。そのまま彼女は、藤野さんに付き添って行ってしまった。僕が、何だったのだろう。すごく気になる。やっぱり、ぼーっとしていて、変な奴だとか、頭がおかしいとか考えていたのかな、そう思った時、ある事に気がついた。もしかして、口が動いていないのに聞こえる声は、誰かが考えていることなのかな。そう考えれば、つじつまが合う、わけないか。そんな超能力みたいなこと。まさか俺、超能力者だったのかな。俺は、そんな支離滅裂な事を考えていた。
「すごかったな。あいつどうしたのかな。」
と話しかけられて、俺は我に返った。
「あいつって？」
そう聞き返すと、原田は大げさなくらい眉をひそめて、言った。
「藤野だよ。おまえ、見てなかったのか？」
そういえば、すっかり忘れていたが、たいして興味がないので、
「ああ。そういえば。」
と返す。そんな事よりも、もし他人の心の声が聞こえるんだとしたら。そのことにすっかり気を取られていた俺は、さらに深く思いを巡らせてみた。心の声が聞こえるってことは、自分がどう思われてるかが、さっきみたいに聞こえてくるってことだよな。気にはなるけど、悪く言われていたら？聞きたくない。毎日、どう思われているかが心配で心配で、人の目におびえながら、必死に生活しているっていうのに。そんな事を考えていると、胃が痛くなってきた。思考を遮断し、立ち上がった。
　数学の授業では、グループをつくって教えあうことが多い。今日もグループで活動した。いつもは気が重いが、今回は、なぜかうきうきしている自分がいる。そうだ。多分、藤野がいないせいだ。彼女は、僕のことをじっと見つめては、いろいろ命令してくるのだ。彼女がいないだけで、こんなに楽だなんて。そこまで考えて、慌ててその思いを振りはらった。こんな事を考えているから、目を付けられるんだ。そう自分をたしなめてから数学の問題に向き合った。
「田宮君、この問題分かる？」
と、同じグループの恵に聞かれて、問題を解いていると、様々な心の声と思われるものが聞こえてきた。
【ああ、早く授業が終わらないかな。】
【眠い。昨日もっと早く寝ればよかった。】
【明日、どんな服買おうかな。】
たくさんの声が飛び交う中、一つだけ他のものよりもはっきり聞こえたものがあった。
【亜紀ちゃんがいないと、田宮君とたくさん話せるから、嬉しいな。】
はっとその声がした方を見ると、恵が一生懸命問題を解いていた。嘘だろ。たしか、恵は俺のことなんか嫌いだと、藤野が俺に自信満々に語ってたぞ。だから俺は、恵が嫌なら、と話しかけるのを控えていたのに。どういうことだ？恵に問いただしたいところだったが、どう思われているか分からず、怖かった俺は、迷いに迷った。とうとう、意を決して恵に話しかけた。
「なあ、恵。俺のどこが嫌い？」

すると、恵が目に見えておろおろとし始めた。
【おかしいな。亜紀ちゃんは、優斗君はあなたの事苦手みたい、って言ってたのに。】
これには、おれも仰天した。
【だから、みんながいるところでは、なるべく距離を置くようにしてたのに。】
「藤野がさあ、恵は俺のこと嫌いだから話しかけない方がいいって。そう言ってたんだけどな。」
そう伝えると、彼女も目を伏せながら、教えてくれた。
「亜紀ちゃんに、田宮君には構わない方がいいって言われたの。ますます嫌われるだけだからって。あんな事あって、嫌われないわけないじゃないって。私、確かにそうかも、と思って。」
そんな事ない。そう言おうとしたが、自信が持てなくて、口に出すことができなかった。本当は好きだけど、もしそんな事を伝えたら、恐ろしい情報網をもつ藤野にかぎつけられて終わりだ。俺も、何をされるか分かったもんじゃない。
【私は優斗君に迷惑かけちゃうからな。】
と恵から聞こえて来る。そんなことない。むしろ、俺のほうが迷惑かけちゃうくらいだ。そう言ってあげたいが、意気地なしの俺には無理だった。
　授業が終わり、俺が教室から出ていくと、藤野と恵が廊下で話していた。時折、藤野が声を荒げている。何をしゃべってるのかは、よく聞こえない。けれど、恵の様子を見ると、楽しい話をしているわけではなさそうだ。藤野と目が合いそうになり、急いで、ドアの陰に隠れたが、どうしても気になって、もう一度出ていこうとした。
「いたっ。」
鈍い痛みを感じて、前を見ると、恵と話していたはずの藤野が立っていた。あまり関わりたくはないが、どんな話をしていたのかが気になるので、我慢することにした。
「目赤いけど、大丈夫？」
そう問いかけると、
【ちょうどいいか。この涙を使おう。】
と聞こえてきた。彼女は、涙を流しながら、俺の方を見上げてきた。いやになって、目線を彼女から外すと、
「ごめん。何でもないから。」
と話かけてきた。藤野はいったい何がしたいんだ？泣いてみたりなんかして、構ってほしそうに見上げてきたかと思えば、何でもないなんて言ってくる。
「う、うん。」
と取りあえず返しておく。まったく、いつもは俺には笑って話しかけてくるのに、今日はどうしたんだろう。まだ本調子ではないとかかな。そう思った時、
【うれしい。田宮君はやっぱり心配してくれるんだ。今度は本当に涙出てきそう。】
なんて思ってるのが聞こえてきた。俺のこと、見下して笑ってるくせに、こういうときだけ調子いいよな。
【え。あの田宮まで。私のことを馬鹿にしていたの。】
と聞こえてきたと同時に、また泣き始めた。なんでいきなり泣くのか、もう訳が分からない。もう、いやだ。早く離れたい。俺は、その一心で、彼女に話しかけた。
「大丈夫、藤野さん。やっぱりまだ休んでいた方がいいかもよ。」
「田宮君は、私のこと、嫌いなの？」
今度は口に出して質問してきて、なかなか離れられない。
「いきなりなに？僕なんかしたっけ。」

ああ、なんなんだよ。藤野に話しかけられるの、苦手なんだよな。ここで嫌いとか言ったら、恐ろしいことになりそうだしな。
「なんで？あたしに助けてもらったくせに。」
「そうだね。感謝してるよ。」
はあ？おまえが起こした問題だろ。俺たちは立派な被害者だって。というか、俺口に出していないのに、こいつ何でこんなに反応してくるんだ？
「あなたは、ずっとあたしのこと見てたじゃない。」
「僕にはそんなつもり…。」
まさか、俺がおまえのことを好きだったとでも思ったか。俺の心をズタズタにしておいて。
「ズタズタにしてきたのは、あなたじゃない。今も以前も傷ついているのはあたしよ。」
何を言ってるんだ。自意識過剰だ。だから嫌われるんだ。すると、今まで考えないようにしてきたことが、次から次へとあふれてきた。小さい頃から仲が良かった俺と恵は、中学生になってからも、お互い仲が良かった。なぜ目をつけられたのかは分からない。そのうちに俺と恵の酷い噂が流れ始めた。思い出したくもないようなデマが浸透し、俺たちは目を合わせることすらできなくなった。何を言われるか、分かったものじゃなかった。自分だけならまだしも、恵が暗い顔で座っているのを見るのが、何よりもつらかった。そんな時、藤野が恵の味方をしたんだ。このクラスの人たちは、形だけでも彼女に従っていたから、瞬く間に俺らの噂は忘れ去られた。そして、彼女はそれから、助けた俺らをゆすっていたのだ。けれど、おれはもうだまされない。一度、藤野と一番仲のいい子が
「ごめんね。亜紀のこと信じないで。」
と話しかけてきた。そのときはよく分かっていなかったが、今日の数学のときの恵の話でようやく分かった。あの、酷い噂を流した張本人は藤野だったってことが。もう、我慢できない。みんなにどう思われようとかまわない。いじられたって、馬鹿にされたって、もう平気だ。
「藤野、俺らを馬鹿にするな！おまえが偉そうにしていいわけじゃない。恵を脅したら、もうただじゃ済ませないからな。」
と一息にまくし立ててしまった。そして、教室から出た。みんなが今のやり取りを見ていたみたいだ。様々な心の声が聞こえてきた。ひどい事思われてるんだろうな。そうあきらめた時だった。
【田宮君、すごい。】
【あの藤野によく言ったよ。】
【優斗のこと、見直した。もう馬鹿にできないな。】
【私も亜紀にいろいろ言われてたけど、田宮君みたいにはっきりいってみようかな。】
あれ？何でだろう。これは、褒められているのかな。状況が理解できずにいると、恵が隣にやってきた。何を言おうか迷っているみたいだったけど、全部俺には聞こえていた。
【ありがとう。守ってくれて、嬉しかった。】
胸の中に暖かいものがじわじわと広がってきた。俺の方こそ、今まで言ってやれなくてごめんな。そう思った時だった。
「ううん。こっちこそ、ごめんね。」
と恵が話しかけてきた。口で。
「え？」
俺、今何も言ってないけど。戸惑っている俺に恵が説明をし始めた。
「田宮君、あなたも私たちの心の声が聞こえてたんでしょ。私たちにも、あなたの心の声が聞こえていたのよ。」
「おまえは、自信持てよ。」
「誰も、もうおまえを馬鹿にできないよ。」
「いままで馬鹿にしてたのだって、本気じゃないからさ。」

俺の周りにいるやつらから口々に言われた。
「ありがと。」
リリリリ…。目覚まし時計の音が鳴り響く俺は、ゆっくりと瞼を上げた。夢、か。そう理解すると、温かい涙が頬を濡らした。

《作品の意図》

「もしも他人の心の声が聞こえたら。」ということをテーマに、第一章、第二章、それぞれ二人の視点から書きました。
現実にありえないことが起こったら、どうなってしまうのかというテーマを小説としてあらわすことによって、今の自分たちと向き合い、考えることができればな、と思います。

《作品の寸評》

他人の心の声が聞こえてくるという設定が独創的である。周囲の人の口は動いていない。自分の目と耳がおかしくなったのか。と丁寧に描いている。さらに、同じ場面や状況を、第一章では級友の羨望の的である「藤野亜紀」の視点から、第二章ではおとなしい「田宮優斗」の視点から描く構成の工夫が見事である。読者を引きつける魅力がある。また、第一章の結び「私の頬が、冷たく濡れた。」と、第二章の結び「温かい涙が頬を濡らした。」の対照的な表現にも工夫の跡が見られた。
他人からどう見られているのか。どう思われているのか。他人の目が気になる中学生の心を等身大に表現している作品である。

（審査員／宗　形　幸　子）